

## 年間第 30 主日 (マタイ 22:34-40)

無関心を捨て、神への愛と隣人への愛に力を注ぐ



10月のロザリオ、本当にご苦労さまでした。朝ミサ前のロザリオも立派でしたが、月・水・土曜日の子もたちのロザリオは、本当に立派だったと思います。中田神父は子どもたちが集まってロザリオしていることに途中で気づき、何回か参加しました。教会の動きにまだついて行けず、申し訳なく思っています。

今週の福音朗読で律法の専門家がイエスを試そうとして尋ねます。「先生、律法の中で、どの掟が最も重要でしょうか。」(22・36)これがなぜ「試している」となるのか。律法の専門家は、神が守るように示した律法を、どんな些細なことも漏らさず守ろうと努力していました。それが正しい道であり、それをできない人々は神の救いから外れていると考えていたのです。

そのような律法の専門家ですから、「どの掟が最も重要でしょうか」と尋ねたのは巧妙な「罠」でした。律法のうちのどれかを指して「これが最も大事だ」とイエスに答えさせて、「イエスは律法を漏らさず守ろうとしていない」と非難する口実を得ようとしていたのです。

律法の専門家たちの偽善が、ここに見えます。彼らは神が人をこよなく愛しておられること、人を愛しておられるから神は掟を守るように期待している、この点には関心がなかったのです。神が人を愛しておられることを何より大切に考えなければならないのに、掟だけを切り離して考え、掟を忠実に守っている自分にしか関心がなかったのです。

神が私たちが愛しておられることを心から感じられるなら、神の愛に、生活や掟で精一杯応えようとするでしょう。しかし神の愛に無関心であるなら、私たちは神の計らいに何も答えようとしません。

同じように、神が身近にいる人を心から愛しておられるのだから、自分もその身近な人を心から愛するように期待されています。しかし身近な人に無関心であれば、その隣人を愛しようとしません。神が時代時代に私たちが心から愛して働いてくださっているのに、私たちが隣人に目を向けず、手を差し伸べないとしたら、神は悲しむことでしょう。

掟だけを切り離して考える人は、掟を守ろうとする目の前の人が見えなくなり、無関心になります。先日教皇はイスラエルとパレスチナの住民のために、祈りと断食を呼びかけました。私たちはどうしても、テレビの中で起こっている出来事として切り離して考えてしまいます。神が愛しておられる身近な人として見るために、教皇は祈りと断食を呼びかけました。今からでも遅くはありません。教皇がイエスの代理として、身近にいる人ですと示されたイスラエルとパレスチナの人々のために、祈りと犠牲をささげましょう。

掟には、神の愛が込められています。神を心を尽くして愛する。その答えとして、十戒や教会の掟を理解します。今泣いている人、今悲しんでいる人を神はいちばん近くにいて愛しておられます。その

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

神に応えるために、私たちも泣いている人、悲しんでいる人を愛しましょう。そして具体的に手を差し伸べましょう。

神が私たちを愛してくださっている、そこに根ざして生活を整えていく時、私たちはイエスの愛の掟に生きる人になっていきます。

年間第 31 主日(マタイ 23:1-12)

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。